
いわくつき物件にご用心!?

umo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いわくつき物件にご用心!?

【Nコード】

N5491V

【作者名】

umo

【あらすじ】

この春より貧乏大学生ライフを送ることになった俺は、格安のアパートを探し出すことに成功した。そこには幽霊が出るという『いわく』があったが、そんなもの全く信じる気になれず、喜んでそこに入居した、のだが……ちよつと甘く考えていたかもしれない。

その部屋ときたら、異常に冷え込むわ、変な物音がするわ、物が勝手に失くなるわ、天井を突き破って女の子が降ってくるわ………
………はい？

「どっ……ど、どうも、天井裏居住のお化けです。う、うらめ

しや」

「……。もしもし、警察ですか？ 不法侵入者が……」

「あぁん、そんなご無体な！」

——なんだかんだと下らないやり取りを経て、結局、俺は天井から降ってきた少女『るい』と奇妙な共同生活を送ることとなる。

しかし彼女の行動が原因と思われた幽霊騒ぎに意外な事実が発覚して……。

微妙におバカな不法入居少女、隣人のエロいお姐さん、天然巨乳なウェイトレス、好青年ウェイター、厨房担当セクハラ先輩、人のいい店長………幽霊騒ぎは一体誰の仕業だ！？

貧乏アパートとバイト先のファミレスで巻き起こる、ほんの少しホラーなラブコメディ！

「1」いわくつき？

「1」

世の中には『いわくつき物件』というものがある。

幽霊が出るとか、昔そこで殺人事件が起こったとか、入居者がなぜか次々と自殺していくとか、まあそういう悪い噂のある物件のことで。

当然、そういうところは総じて物件価値が下がり、とんでもない格安で売られていたり貸し出されていたりする。

俺が借りたアパートの一室も、まさにその類だった。

その家賃、なんと五千円。もちろん月々で、だ。

どんな片田舎でもありえないような金額に、俺は一も二もなく飛び付いた。同じアパートの同じ間取りの部屋が月五万円だったことを考えると、どれほど破格だったのか分かるだろう。

——第一志望の大学に合格したは良いが、実家からはかなり遠いために一人暮らし。親から「学費しか面倒みてやんね」と言い切られた俺は、生活費を自らのバイトの稼ぎから出すこととなった。となると必然、待っているのは節制生活。その支出の中で最たるものは、家賃だ。ここを最小限に抑えられれば、というか抑えなければ、まともに大学生活を送ることすら厳しいだろう。

そんな中で格安物件を見つけられたのは、僥倖だったというより、ひとえに不動産屋をハシゴして回った俺自身の執念によるものだろう。

苦勞して見つけたんだから、『いわく』なんて些事だ、些事。

そうそう、俺の借りたアパートの『いわく』だが、まあなんともありがちなもので。

出る、らしい。

オバケが。

…………くっだらねえ。

別に心霊現象に対して、科学的根拠で理論武装して徹底否定するような嫌味なことはしない。が、特に信じているわけでもない。今まで心霊現象らしきものに出会ったことがないというのがその理由だ。わかりやすい判断基準だろう？

まあ、あまりにもヤバそうなものだったらさすがにやめておこうとも思ったが、念のため不動産屋さんから詳しい話を聞くと、

「部屋に一人きりのはずなのに人の気配がする」とか

「変な音や声が聞こえる」とか

「寝ていたら寒気がして飛び起きた」とか

「ヒトダマみたいなのが天井付近に浮いていた」とか。

なんだか害の薄そうな……言ってしまうえば、シヨボイものばかりだ。

———というわけで。

「ここが今日から俺の第二の家になるのか……」

引っ越してきました、いわくつき物件へ。

軽く築三十年は経っているであろうモルタル塗りの古臭いアパート。いかにもお化けとかが棲みついていそう……というほど寂れている様子はなく、意外にも丁寧の手入れされているようだ。

外壁や廊下、階段などを見る限りでは汚れている部分はあっても特に痛んでいる部分はない。しっかりと重厚に、『昔ながら』という言葉がぴったりくるような、古き良き昭和な雰囲気を出している。まあ、なかなかいいじゃないか。割と好きだ、こういうのは……もつとも、周りに乱立する新築マンションも同時に視界に入れてしまうとすごく浮いて見えるのは難点だけでも。

各階に四部屋ずつの二階建てで、まあアパートとしては小ぢんまりとしているが、これでも最寄駅まで徒歩一分。大学まで徒歩四分。近くになんでも売ってる総合スーパーあり。結構な都会であるこの

地域に建つアパートとしては立地条件が非常にいい。いくら建物が古くとも、正規の家賃五万ですらも充分に破格じゃないだろうか。そのさらに十分の一の家賃である俺の部屋はというと、一階の角部屋、一〇四号室だ。

俺は今、その扉の前に立って鍵を差し込んでいる。

ちなみに扉の前までは大家さんが案内してくれたが、その後は鍵だけ俺に渡してそそくさと立ち去って行った。結構人当たりの良さそうなおばちゃんだったんだが……あれか。触らぬ神にたたりなし、幽霊になんて関わりたくないということか。……なんだか彼女の態度を見てちよっと不安になってきたが、まあ気にしても始まらない。今日から夢の一人暮らしが始まるんだ。

気合い入れて、さあ、その第一步を踏み出すぞ！

腕に過剰なほど力を込め、鍵をガチャリと回す。

そして徐に扉を開け放つと、

「――冷^{つめ}たっ！？　ってか寒い！？」

なぜだか部屋の中から冷気が吹きすさんできた。思わず上着の襟もとを引き寄せる。

「なんだ一体……」

半ば呆然としながらも玄関に足を踏み入れる。ぎぎぎ、と錆びついた不快な音を立てて扉がひとりでに閉まった。後で蝶番に油でも差しておこう。

そんなことより、なんだこの冷蔵庫の中にあるような室温は。

軽く部屋を見て回ったが、どうも部屋中が何らかの事情で冷やされているらしい。

大家さんが気を効かせてエアコンのスイッチを入れておいてくれた……ってのは考えにくいだろう。暦の上では春とはいえ、まだ三月の末、どちらかといえば暖房の方がありがたいような気候だ。どっちにしろこんな低温にされても困るし。

「んー……？」

よくわからないがなにか手違いでもあったのだろうか。

まあいいか。とにかく部屋の探索がてら窓を開けて冷気を逃がそう。

部屋の間取りは十畳が一間に、キッチン、風呂、トイレ付き。ちよつと心配だったのだが、トイレは幸いにも水洗式だ。一度リフォームでもしたんだろうか、何気にウォシュレット機能とかもついていた。使わないけど。

周囲が高層マンションに囲まれていて薄暗い雰囲気があるアパートだが、日照権の獲得には成功したようで、正午現在、南側のベランダには燦々と日が差し込んできている。これなら少なくとも午前中は大丈夫そうだ。ベランダはそこそ広く、洗濯機を置くスペースもちゃんとある。

ただ、このベランダ、見通しのかなり悪そうな狭い路地に面しているのが気にかかるが……塀を高くすれば洗濯物に日が当たらなくなるし、防犯は自分自身で気に掛けるしかないか。

あと部屋の設備と言えば、エアコンが付いているのが素敵すぎる。しかも割と新しい型だ。実家にあったエアコンは古くて、半ば騒音発生装置になってたからなあ。これで快適に安眠できるってもんだ。あれ？ でもエアコンが備え付けだなんて大家さんからも不動産屋さんからも聞いてないような……。前の住人が置いて行ったのをそのまま大家さんが密に残したんだろうか。

まあ、いいか。あつて困るものじゃないし、余裕があれば夏にでも買おうと思ってたからな。なんだか得した気分だ。

ざつと見た感じ、全体的に生活環境は申し分なし。

なぜ入居当日にあれこれ確認しているかというと、実は下見には来ていないからだ。なんせ、実家からここまで電車を乗り継いで四時間もかかるのだ。正直めんどくさかったし、家賃五千円なんて他にはないから多少の不便があってもいいや、とか思っていた。実際には不便もなにもなくて重畳重畳。

「さて、と」

換気も終えたし、あとは荷物が送られてくる前に昼飯でも食いに

行くか。

戸締りは忘れず、俺は駅の近くで見たファミレスへと足を運ぶのだった。

——異変らしきものは帰ってきてから再度起こった。

「……………寒い」

玄関口に立ちつくしたまま、呟く。

俺の部屋の中は再び冷蔵庫と化していた。

腹も満たされ、可愛いウェイトレスと話ができて、機嫌良く帰ってきたらこの有様だ。

霜が降りるほどではないが、曇り空の外よりもだいぶ寒い。

エアコンのスイッチは……切れている。というかさつきは気が付かなかったが、よく見たらプラグが抜かれている。これでは付けようがない。

エアコン以外に冷えるようなものは何もない。冷蔵庫はこれから運ばれてくる予定だ。

「じゃあ……なんでだよ？」

唐突に頭をよぎる言葉があった。この部屋を紹介してくれた地元の不動産屋さんの言葉だ。

『あ……この物件はねえ。所謂、「いわくつき」なんだよ。その、出るらしくてね——』

お化けが

「……………」

ぞわりと首筋の産毛が逆立ち、思わず首を竦めてしまう。

いや、単に寒いだけだ。

幽霊とかないない。

きつと地理的な問題だ。突然部屋の中が寒くなるなんて、この辺

りの地域ではきつとよくあることに違いない。

あるいは古いアパートだから、なんかそういう……ほら、アレがあるかもしれないな、うん。自分でも何が言いたいのかわからなくなってきたが、そういう結論にしておこう。

そう、全ては古いアパートだから………だから、出る？

「いやいやいや……」

なに考えてんだ、俺は。

新天地にきてちょっと不安になっているのかもしれないな。初日からこれじゃあ思いやられる。

ここは深呼吸だ。

すってー……

はいてー……

すってー……

はいて————コンコンッ

「————っ!？」

急に背後から物音がして吐きかけた息を呑む俺。恐る恐る振り返ると——

「すみませーん、桜井運輸のものですが。瀬古井青磁さん？　いませんかー？」

玄関扉の向こうから若い男の声。……引っ越し業者だ。

「あー、はいはい。今開けます」

答えつつ、異様に冷たいノブに手をかける。

開ける直前、なんとなく部屋の中を振り返ってみた。

………別に何も無い。白いエアコン以外なにも置いてない殺風景な部屋だ。今から荷物を運ぶのだから当たり前だが。

ふん、と鼻を鳴らし、勢いよく扉を開ける。

外にいたのはしっかりと二本足で立つ、至って普通のア・ン・ちゃんだ。清潔ながらもくたびれたツナギがよく似合っている。

挨拶もそこそこにトラックから大きな荷物を運び出してもらおう。荷物が少ないからか、はたまた小さな運輸会社で人手が足りないか

らか、どうやら二人だけしかいないらしい。

彼らが慎重に冷蔵庫を運び入れるのを眺めていると、ふと部屋の中が冷え切ったままだということに気が付いた。

「あ、すみません。寒いですよ。ちょっとエアコンの調子が悪かったらしくて……いま窓開けます」

「え？ あ、はあ……？」

なんで冷房なんて入れてたんだ、とでも思ったか、引っ越し屋のあんちゃんも生返事だ。言ってる俺だって意味分かんねえよ。エアコンなんて触ってもないのに。

——その後は特に何事もなく、無事に俺の引っ越しは完了した。ただし。

去り際に引っ越し屋のあんちゃんがこんなことを言ったのだけが気になった。

「それでは自分たちはこれで。うちはエアコンの取り付けなども請け負っておりますので、その際はぜひお声をおかけください」

今度は俺が生返事を返す番だった。

うちには既に、どうやっても目につくところにエアコンが取り付けられている。

「2」お隣さん？（前編）

「2」

引越し業者が去ってから二時間弱。

組み立て式の棚やベッドに思わぬ苦戦をしたり冷蔵庫のアースの繋ぎ方に悩んだりということがあったが、だいぶ荷物の整理も進んできた。もう数十分ぐらいでひと段落つきそう。

引越しのあんちゃん言葉はもう気にしていない。あれは去り際の定型句だ。エアコンが既に設置されていたのをすっかり忘れてそのまま言ってしまったということだろう。

部屋が冷えていた件については……保留だ保留。あのときはどうかしていた。落ち着いて考えてみれば特別害があったわけではないし、これから暖かくなってくる季節、部屋が涼しくなるのはいいことだ。

幽霊がどうかはあえて考えの外に置く。そんな存在がこの部屋にしようがいまいが、見えない俺には関係のないことだ。

俺に害や悪影響があるかないか。そこだけが係争点で、俺はこの部屋が冷える不思議現象に対し、『少なくとも冬が来るまでは問題ない』という判決を下した。

そんなわけで、友人一同に「お前の考え方って、幸せだよな」と絶賛を受けるほど精錬された精神構造をしている俺は、端から転居など考えもせず、荷解きを続けているのであった。

——とりあえず今日と明日は荷物整理と必要なものの買い足し、落ち着き次第にバイト探して……

と今後の計画を立てつつ段ボールを開封していた俺の耳に、奇妙な音が鳴り響いた。

——パキッ

「……………」

音源は天井辺りだろうか。これぐらいじゃ驚く気にもなれない。それにこの乾いた木片を折るような音。確かこれは、『木鳴り』ってやつだ。詳しくは知らないが……木材が乾燥して、収縮する際に出るとかなんとか。

そういえば『いわく』のひとつに「奇妙な物音が聞こえる」というものがあつた。

まさか、前の住人たちはこれをお化けの仕業だと思つたんじゃないかな？

なんてことを考え、手を止めることもなく荷解きを続けていると、

——カチャ……カチャカチャ……

また物音だ。今度も上から聞こえる。

汚れが沁みついた板張りの天井を見上げるが、もちろん何も変わったところはない。

古いアパートだから壁や床も薄いのだろう。二階の住人がなにかをしているに違いない。

おっと、住人で思い出した。引っ越しのあいさつ回りしなきゃな。とりあえずは隣と真上だけでいいよな？

今朝の内に準備しておいた手土産の紙袋を手に取り、入っていた三つの箱を取り出す。中身はそれぞれ実家の近くの洋菓子店で買ったロールケーキだ。俺の好物でもある。

だいぶ冷えてきた冷凍庫へ保冷剤を放り込む。ついでに箱のひとつもそのまま冷蔵庫へ入れておいた。

それから残った二つの箱をそれぞれ紙袋に入れ直し、暗くならないうちに腰を上げる。

すると、

——カチャ……カチャ……

やはり上から、今度は陶器を打ち合わせるような音が聞こえた。二階の人、食器でも洗ってるのか？ その程度の音まで漏れてくるなら、これは相当気をつけないとならないんだが。夜は音楽がかけないな……。

ということ物音なんて気にせず、俺は隣の部屋へ向かう。

上着も羽織らず部屋着で外に出てしまったが、やはり少し寒い。春は一体いつ来るのやら、暦なんて当てにならないな。とにかく、さっさと要件を済ませるとしようか。

隣室のネームプレートには『上下』と書かれていた。なんて読むんだろう。ウエシタ？ ジョウゲ？ カミシモ？ そもそも人の名前かどうか怪しい。

まあ本人に訊ねれば済むことかと思いを打ち切り、呼び鈴を鳴らす。

……………。

出ねえ。

今度は扉を軽く叩き、

「すみません！ 隣に越して来た者ですが」

声を張り上げてみるも、聞こえるのは背後の道路を車がゆつくりと通り過ぎる音だけだ。

留守だろうか？ よくよく考えてみれば現在時刻は平日の昼間だ。春休み中の学生か専業主婦でもなければ、いないことの方が多だろう。

と、出直そうとしたところで、部屋の中から物音がした。次いで、声がかけられる。

「あーい。ちょっと待ちなー」

若そうな女の人の声だ。なんともやる気がなさそうではあるが。待つこと十数秒、扉が開けられる音がしていよいよお隣さんとの初対面——

「へいへい。どちらさんで？」

「……や、あの。お取り込み中なら出直しますが？」

お隣さんの姿を認めた瞬間、思わずそう言ってしまった。

彼女は声から想像できる通りの若い……といっても俺よりだいぶ上……二十代半ばか後半ぐらいの女性だったのだが、なんというか、その、刺激的というか扇情的というか、非常に目に毒な格好をして

いらっしやった。

ぶっちゃけて言えば、バスタオル一枚だった。

頭の頂点でざっくばらんに結ばれた、しつとりと濡れた黒い髪。そこから仄かに漂う湯気。微かに上気した頬は官能的なものを感じさせ、そうして見るときつく釣り上がった目も、ある種の人間には堪らない興奮を覚えさせるに違いないと思えてくる。

整った顔立ちに負けず劣らず、スタイルも抜群だ。173センチある俺よりも長身だが、それでいて体格のバランスがいい。

女性らしさを感じる丸みを帯びた肩から伸びる腕は理想的な肉付きで、主張の激しい胸を押さえつけるように組まれている。腕に潰される形となっているそれは髪から滴り落ちるしずくの受け皿となり、雄大な双子山に囲まれた湖を形成していた。

そこから視線を下ろすと、濡れて肌に張り付いたバスタオルが優美な双曲線を描いており、その下の丸いヒップラインを強調している。そして腿を伝うしずくの軌跡は長く伸び、健康的な脚線が目まぶしく映った。

モデルをやっていたと言われてもまったく疑う余地のない美女が、バスタオル一枚を身に纏い、ドアに凭れかかって仁王立ちしている。たった今まで風呂に入っていましたと言わんばかりの格好に、俺はその艶めかしい肢体を嘗めまわすように見詰めて……じゃなくて、至って常識的な反応として目を逸らしながら（でもやっぱりちらちらと盗み見ながら）出直しを提案したわけだが、

「んん？ 別に構わねえよ。見られて減るもんじゃねえしな」

おっとこまえな返答である。姐御とか姐さんとか呼びたくなってくるな。

でもこのアパートの前の道路は、周辺住民しか利用しないような路地とはいえ、駅にほど近いこともあってそれなりに人も通る。

ここはさっさと用事を済ませて引っ込んでもらうのが得策か。できればこのような美しいお姐さんとはじっくりねっとりとお話したいところではあったけれども。

「まあ気にしないならいいですが。改めましてこんにちは、今日、隣に越してきた瀬古井青磁せこせいじといいます」

できるだけ胸に視線を送らないように挨拶すると、姐御は「おお」と感心したように声を上げた。

「少年がお化け部屋の今回の入居者か。半年ぶりの犠牲者となるわけだな」

「お化け部屋って……」

すぐく不吉で失礼なことを楽しそうに言う人だなおい。

しかし、そうか……いわくつき物件の噂はアパート住人にも伝わってるんだな。厄が移るとか言って変に避けられなきやいいけど。

俺が引き攣った顔でどう反応を返すべきか迷っている間、お隣の姐御は俺の顔をまじまじと見詰めてきた。なんだか値踏みされてる感じがするのは気のせいだろうか。

よくわからんが……とりあえずお化け部屋だの犠牲者だのについてはスルー、渡す物を渡してひとまず引っ込んでもらおう。あまりに目の毒で俺がつらい。

俺はふたつ持っていた紙袋のうち、ひとつを姐御に差し出した。

「よければこれ、どうぞ。ロールケーキです」

「へえ、わざわざ手土産まで持ってくるとは感心じゃないか。最近のやつはろくに挨拶にも来ねえからなア」

嬉しそうに受け取ってくれたのはいいけど、この人に常識を語られるのはちょっと違和感があるよなあ……。まだ第一印象でしかないけど、なんか元ヤンキーっぽいし。レディースの族長とか過去にやってそう。

なんて失礼な感想を抱いていると、姐御がとんでもないことを言い出した。

「立ち話もなんだな。ちょっと上がっていきな。茶ぐらいは出してやる」

「は？ いや、でも……」

「ガキが遠慮してんじゃねえよ。つーかここじゃあたしが寒いんだ

よ。おら、とつとと上がりな、少年」

姐御は顎をしゃくって部屋の中に入るよう促した。

っていうかがキって……。俺はそんなに幼く見える容姿はしていないつもりだ。それに遠慮しているというよりは気が引けてるんだが……。そして寒いのはあんた自身の責任だ。

なんだかんだ心の中で文句をつけながらも、「じゃあ、折角なので」とか言いながら上がらせてもらうことにした。すれ違う際に漂ってきたシャンプーのいい香りは、脳の記憶野にしっかりと留めておいた。

——まあ、初対面の女性の部屋に上がり込むのに下心がないとは言わない。むしろ下心がほとんどのウェイトを占めている。好みド真ん中ではないが、美人さんの知り合いは多いに越したことはないしな。性格も、少なくとも破綻はしていないようだし。

……ま、上がったのにはもう一つ理由があるといえはあるんだけど。

中に入ってみると、部屋の間取りは俺のと同じということが分かった。玄関を入れて右手に洗面所と浴室、左手にトイレ。奥への十畳のワンルームに続く途中にキッチンが設置されている。

肝心の十畳間フライベートルームに入っの第一印象だが……拍子抜けするほど普通だというのが正直な感想だ。

「適当なところに座ってな」

言われ、テーブルの前の座布団に腰を下ろす。それから姐御が洗面所の方へ姿を消したので、俺は遠慮なく部屋を見渡し始めた。

可愛らしい調度品などはほとんどないが、女性らしさに欠ける代わりにすごく清潔にしているのが分かる。意外に綺麗好きのようだ。もつとこう、ビールの空き缶やら脱ぎ散らかした下着やらが散乱しているようなイメージがあったんだが。さすがに偏見が過ぎたか。ただし、ひとつだけやたらと目につくものがあった。

神棚。

どうしてだか知らないが、北側の壁——その向こう側に洗面所の

あるところ――の上の方に神棚が設置されていた。

女性の一人暮らしの部屋に神棚はさすがに違和感がある。まあ古臭いアパートなので、そういう意味では調和していると言えなくもないのだが、洋室にはちよつとどうなんだろう。

と、そこで洗面所の扉が開く音がしたので、慌てて居住まいを正す。

着替えるの早いな――と思って振り向くと、再び目に毒な光景が映った。

胸元がざっくりと開いたタンクトップに、綺麗な生足を惜しげもなくさらすホットパンツ。よく似合っているとは思うが、さっきとあまり露出度が変わらないのは気のせいだろうか。っていうか寒くないのか。そう思っていたらどこから取り出したパーカーを羽織った。それでも胸元が露出したままだが、いいのか。いや、俺としてはいいんだけど。大歓迎だけど。

姐さんはまずキッチンに立ってやかんを火にかけ、それから俺の対面の座布団に腰を下ろした。うーん、残念。この位置からじゃ美麗な御御足おみあしが拝めないじゃないか。仕方ないのでタンクトップを押し上げる豊満なバストだけで我慢するでしょう。

そんな邪な考えは一切表情に出さず、俺は手始めに問い掛ける。

「それで、え……つと、ウエシタさん？」

「あ？ 誰だそりゃ。あたしの名前はジョウゲだよ。上下じょうげさくら」
さくらさん……いや、さくら姐さんか。覚えておこう。

下の名前の方を気にする心とは裏腹に、口では苗字の方に食いついてみる。

「あれ、ジョウゲって読むんですか。変わった苗字ですね」

「まア、よく言われるな。でも確か、中国地方のどこかにも同じ名前の地名があったはずだぜ」

元ヤンの姐御に蘊蓄を語られるの図。ちよつとシユールだ。いや、元ヤンとは誰も言ってないけど、雰囲気的に。

「んで、少年の名前は……『ズルイ』だったか？」

「『瀬古井^{セコイ}』です。……わざと言ってんでしょ」

「はははっ、バレたか」

さくら姐さんは快活に笑い、続けて聞いてきた。

「で、少年は大学生か？」

「苗字をネタにしといて結局『少年』呼ばわりっすか。俺は今年から大学生です」

「呼び方なんてどうでもいいだろー。大学つつうと近くのあるところか？　なかなか頭良いんだな、少年は」

彼女の言う通り、俺の合格した大学は全国的にも結構ハイレベルなところだ。そうでもなければ親が独り暮らしを許してくれなかったので頑張ったわけだが。

「まあ、頭が良いかはなんとも言えませんがね。大学の授業は高校までの勉強とは違うっていうし」

「はん、謙虚だね。そこは自信満々に『首席で卒業してみせます』ぐらい言ったらどうだ？」

「――へえ、自信のある男性が好みなんですか」
わざとらしくにやりと笑って言っていると、

「残念ながらあたしに年下趣味はないよ。最低でも自分の身で稼げるようになってから出直しな。そしたら『青年』と呼ばび改めてやらア」

と、適当に手をひらひら振られながら切り捨てられた。

言い返そうとしたところでやかんが湯気を吹き始め、さくら姐さんは席を立ててしまった。

……うーん、あの容姿と年齢なら当然というべきか、男のあしらいに慣れてる感じだな。手ごわそうな相手だ……って、別に俺も本気で口説くつもりはないんだが。

キッチンに立つ姐さんの後ろ姿（主に足とかお尻とか）を凝視しつつそんなことを思う。

少なくとも四年はこのアパートに住むことになるのだろうし、ご近所さんとの良好な関係は結んでおくに越したことはない。

——相手もそれを望んでいれば、の話だが。

しばらくして姐さんがティーセットとロールケーキの乗った皿を二人分運んできた。ロールケーキといっても、もちろん丸々一本を買ってきて渡したわけではない。姐さんに渡した分は、ふた切れになったこれで全部だ。

「ほらよ。“お持^もたせ”で悪いけど、まあ味わって食べ」

「はい。いただきます」

俺が持ってきた手土産を出すのに、乱暴な口調ながらもわざわざ断りを入れるあたり、ガサツそうな見た目とは裏腹に律儀で常識のある人なのかもしれない。

それに飲み物も至極まっとうな、暖かい紅茶が差し出された。湯気とともにいい香りが部屋に漂い始める。俺は銘柄を当てられるほどには詳しくないのだが、これはなかなかいい茶葉を使っていると思えた。間違ってもインスタントのティーパックなどには出せない、深みのある香りだ。

水道水か、もしくは素で缶ビールでも出されるかと思った、なんて口に出すとさすがに怒られるだろうか？

まずはロールケーキを一口。ふんわりと柔らかく、それでいてフオークを刺しても崩れないような微妙な匙加減で巻かれたスポンジ。その合間にたっぷりと塗られた生クリームは口がとろけるほどに甘いが、喉に落ちた後は不思議と後を引かず、続けていくらでも食べられる。甘いものが苦手な人というのは口の中にきつい甘さが残るのが特に嫌だというが、これならば問題なく頂けるはずだ。

フルーツもなにも入っていないシンプルなロールケーキだが、だからこそスポンジとクリームというたったの二種の素材が最高の状態で口の中で混ざり合うことができるのかもしれない。

俺としては昔から食べ慣れてる味なんだが、うん、相変わらずうまい。やっぱり今朝一番に買ってきた甲斐があったな。

それから紅茶に口をつける。

おっ、悪くない。ロールケーキの甘さとうまいこと調和して、口

の中が濁らない。それでいて喉にしみも全く残らない絶妙な濃さだ。以前俺がバイトしていた喫茶店のオーナーにはどこか一步及ばない気もするが、素人として指摘できることはなにもない、決して一朝一夕でできる味ではないだろうと思わせた。

彼女、この外見で——といったら失礼に過ぎるが——よく紅茶を嗜んでいるのだろうか。

さくら姐さんは、やっぱり律儀に客が先^{おれ}に食べ始めるのを見届けてから自分も口に運んだ。そういう礼節を弁えてる人にはかなり好感を覚える。さっきから第一印象とのギャップが凄いけど、まあそういうのも悪くない。

「……おおっ？ うまいな、このロールケーキ！」

彼女は飲み下した途端にそう感想を漏らし、目を輝かせた姐さんは休むことなくフォークを往復運動させ、あっという間に完食してしまった。

空っぽになった自分の皿を名残惜しそうな表情で見つめる姐さん。近寄りがたいキツめの美女という印象が払拭され、今にも目が潤みそうな、捨てられた子犬みたいな雰囲気^{きずな}が醸し出されている。なんか可愛いなおい。

次いで半分ぐらい残っている俺の皿を物欲しそうな目で見つめる姐さん。今にも飛びかかって来そうな、腹を空かせた野良猫っぽい雰囲気^{きずな}が醸し出されている。いくら可愛くてもこれはあげない。

俺が無視して食べ進めるのを見て強奪は諦めたか、さくら姐さんはこんな質問をしてきた。

「それ、どこで買ったんだ？」

「実家の近所にあるお店です。俺は子どもの頃からよく食べてました。でも残念ながらすごく遠いですよ。ついでに言うとう昼前にはまづ間違いない売り切れるんで、ここから日帰りで買ってくるのは難しいかと」

「そうか……」

本当に残念そうにうなだれるので、少々罪悪感が湧いてきた。と

はいえ、どうすることもできない。いつそ親に頼んで送ってもらおうか？ でもそこまでするのもなあ……。

いや、実はもう一つ、自分用に買ってきたロールケーキがまだ俺の部屋の冷蔵庫に残っていたりするわけだが……うーん、ここは好感度アップのためにあげるべきか？ でもこのロールケーキは俺の大好物でもある。そう易々と差し出すわけには……！

俺がケチくさい葛藤している横で、姐さんは俺の隣に置いてある紙袋を見つめていた。

「……なあ。もう一つあるように見えるけど、そっちは？ それもロールケーキか？」

「え、ああ、はい。これは上の階の人に持っていこうと」

「んじゃ、あたしにくれ」

「はっ？ いや、だから……」

「上の人にとって、二〇四号室だろ？ そこには今は誰も住んでない。空き部屋だ」

「はあ……そうなんですか」

「そうだ。だからあたしに寄越せ」

「……まあ、いいっすけど」

厚かましいお願いに押されるようにしてロールケーキの入った紙袋を渡すと、さくら姐さんはそれをいそいそと冷蔵庫にしまい込んだ。

礼儀を知ってるのか知らないのか。はたまた礼儀を知っていて尚、食欲に抗えなかったのか……。なんだかよくわからない人だ。

まあ、純粹に嬉しそうな姿が見れたということで今の振舞いは目を瞑っておこう。

ロールケーキの虜になった先達者として、アドバイスは欠かさないでおく。

「できれば今日中、少なくとも明日には食べてくださいね。食べるときは少しだけ常温に戻した方が、スポンジがしっとりしておいしいですよ」

「へえ、そうなのか」

「あー、でも、冷やしたのは冷やしたのでなかなかイケますけどね」
「それは悩むな」

「まあ、うまいものはうまいので後でじっくりと味わってくださいよ。……ああ、帰省したときでよければまた買ってきましょうか？
といっても夏休みまでは無理ですが」

「は？ ああ、いや、それは………まあ、そうだな」
思いつきで提案してみたのだが、さくら姐さんは急に歯切れが悪くなってしまう。

こんなところで遠慮するような人だろうか……？

「別に、この程度なら遠慮しなくてもいいですよ。どうせ親にも絶対に一度帰って来いと言われてるし。そのついでっす」

「……ん、まあ、機会があれば頼む、つつうことで」

「はあ、はい。頼まりました」

やっぱりどこか反応のおかしな姐さんに首を傾げつつも頷き、そこで話が一旦打ち切られる。

「……………」

「……………」

しばらくの間、どことなく居心地の悪いような、なんだか不自然な間が生まれた。ここまで淀みなく言葉の応酬を繰り返していただけに、この間隙はなにか重要な意味を持っているような気がしてならなかった。

さくら姐さんはポットから二杯目の紅茶を注ぎ、唇を湿らせている。カップを持つ仕草が上品だと俺は思った。

——さて、なんか姐さんは話しづらそうだし、こっちから水を向けてあげようか。

徐にティーカップを置き、俺は口を開いた。

「ところでさくら姐さん」

「……ねえさん？」

ああ、しまった。つい心の中での呼び名がそのまま口に出てしま

った。

目を丸くして驚く姐さんに、どうしたものかと考え、適当な言い訳を試みる。

「いや、ほら、『好きに呼んでいい』って言ってたじゃないですか」

「『呼び方なんてどうでもいい』ってお前に対して言ったんだ」

「似たようなもんじゃないスカ。姐さんって呼び方、そんなに嫌ですか？」

「う、……いや、別に、なあ……。んー、姉さん……。姉さんか。：

……。……。ま、まあ、好きにしたらいいんじゃないか。まあ、あたしも弟が欲しいって子どもの頃言ってたし……。ってなに言わせんだよ！」

なにやらしばしの葛藤の末に姐さんは早口にそう言って、冷めかけた紅茶を一気に飲み干した。少し頬が赤いけど、照れているのだろうか？　はは、意外に感情豊かでなかなか面白い人だな。

……。ところで、彼女が思ってる『ねえさん』の意味が俺のと若干違う気がするけど、わざわざ指摘する必要もないのでそのままにしておこう。

「で、さくら姐さん」

気を取り直し、再度問う。

できるだけ真剣な表情を作って。

「――そろそろ本題に入ってくれませんか？」

「2」お隣さん？ （前編） （後書き）

場面ごとに一話とするつもりだったのですが、予想外に長くなったので二分割。これからも一万字以内には収まるようにします。

後半はしばしお待ちを。

ところで、今回の序盤に出た『木鳴り』についてですが。

建築から一定年数（木造住宅でも5年ぐらい？）以上経過すると、木材の含水量が安定し、木鳴りはほとんどしなくなるそうです。

……ちなみに主人公が引っ越してきたアパートは築30年以上です。

「2」お隣さん？

（後編）

（前書き）

前回からの続き

「2」お隣さん？（後編）

「で、さくら姐さん」

気を取り直し、再度問う。

できるだけ真剣な表情を作って。

「そろそろ本題に入ってくれませんか？」

「……………あん？」

赤い頬が消し飛んでゆき、代わりに鋭い目が俺を貫いた。

俺はひるまず、目を見返ししながら言葉を紡ぐ。

「俺をわざわざ部屋の中に招待した理由ですよ。話でもあるんですよ？　なにかの勧誘とかですか？」

「……………ははっ、勧誘か。なんでそう思ったんだよ？」

少し相好を崩し、姐さんはおもしろそうに問いかけてくる。

「そりゃあ、初対面の男をいきなり部屋に誘うなんて明らかにおかしいでしょ。裏があるとか思えませんか、普通は」

「……………案外、あたしが少年に一目ぼれしたとかいう理由かもしれないだろ」

「いやいやいや。だったら今までのやり取りはなんだったんスか。

俺、思いつきりふられた気がするんですけど？」

一度紅茶に口をつけ、「それに」と言葉を続ける。

「たとえば俺に惚れたんだとしても、段階を踏まずいきなり部屋に入るなんていう常識はズレな行動をとるのはどうなんだろうと。さつきから見えましたけど、姐さんって意外に常識人みたいですからね。そういう変な矛盾があるんで、きつとなにか常識よりも優先される用事でもあるのかなー、とか思ったわけです」

言い切り、かちゃんと音を立ててティーカップを置いた。

しばしの沈黙の後、「ふうん」と感心したような声を上げて姐さんは言う。

「警戒心の薄い田舎者かと思ったら、意外によく見てるじゃねえか。

……余計なところも見てみたいだけだな」

そう言って彼女はパーカーの襟を閉じて胸元を押さえる仕草をした。……たまに盗み見てただけなんだが、どうやら俺の目線はバレバレだったらしい。でも男なら仕方ないって。自然にそこに目が吸い寄せられるようにできてるんだから。

弁解にもならないことを心の中で思ってたたく意に介さずにいると、姐さんも諦めて話を進める方向に戻ったようだ。

「でもそこまで警戒するときながら、なんで素直に部屋に入ったんだよ？」

「そりゃあ、さくら姐さんの魅力にやられたからですよ。どんな理由であれ、綺麗な人とお近づきになれるなら乗ってみるのが男ってもんでしょ？」

俺がにやりと笑って言うと、姐さんは呆れたように肩を竦め、

「そういうことにしといてやる」

と嘯いた。

でも九割ぐらいは本音を言ったただけだな。

そこにつけ加えて言うなら、早いうちに隣人との関係性を決定づけたかったというのもあったけど。たとえば宗教とかの勧誘なら、ここできっぱりと断ることで今後はそういう話をさせないようにするとかさ。まあうまくいくかどうかは成り行き任せだったけど。でもよくよく考えてみれば、いきなり変な睡眠ガスとか吸わされたりする可能性があったといえばあったので、やっぱりちよつと軽率だったかもしれない。

つと、まあ済んだことはどうでもいい。この期に及んでは、彼女の真意を確かめるしかない。

いつの間にか注がれていた二杯目の紅茶で喉を潤しつつ、姐さんの言葉を待つ。

静かなアパートの一室に、紅茶のすする音だけが木霊した。

「……………はあ」

やがて姐さんの溜息が部屋に落とされた。

「あー、別に勧誘とかじゃねえし、もちろん逆ナンでもない。ちょっと忠告つつうか……ある話がしたかっただけだ。そんなに警戒しないでくれ」

「話……ですか。いいですよ、聞きますよ。どんな話です？」

「このアパートの一〇四号室、通称『お化け部屋』——お前の部屋の話だ」

「……………」

なんかすごく聞きたいような、あまり聞きたくないような。

微妙な俺の心境を知ってか知らずか、姐さんは話を続ける。

「一応聞いとくけどよ、もちろんお前もあの部屋がいわゆるつき物件だと知って入ってきたんだろ？」

「そりゃあね。家賃があまりにも魅力的でしたから」

「みんなそう言って入ってくるけど、あたしの知る限り三か月も持ったヤツはいないよ」

「はあ」

話の方向性がかめず、生返事を返す俺。

姐さんが再度問い掛けてくる。

「少年。あの部屋で既に怪奇現象とか起こってないか？
怪奇現象。」

科学などでは説明のつかない不思議な現象のこと。

さて、俺の部屋でそのようなことが起こっただろうか？

「特になにも起こってませんよ」

一瞬の思考の後、そう答える。

姐さんは特に疑う様子もなく、「そうか」と頷いた。

「でも早いときは入居してからすぐに起こるからな。今夜は気を付けて寝るといいぜ」

「気をつけろって言われても……。具体的にどんな怪奇現象が起こるんですか？」

「色々だな」

姐さんはどうしてだか、楽しそうに笑いながら答えてくれた。

「誰かいるような気がする、急に寒気を感じた、なんて曖昧なものから始まって。鏡に血まみれの少女の姿が映ったが振り向いたら誰もいなかった、壁に変な模様が浮かび上がったんで大家さん呼んできてみたらかき消えてた、ベッドの位置が毎日少しずつずれる、なんてのもあったか。——そうそう、一度、その部屋の住人があたしの部屋に飛び込んできたことがあってね。『ひとりで部屋にいたら背後から誰かに首を絞められた』なんて言ってさ。実際、その子の首には痣ができてたね」

……おいおい、不動産屋さんから聞いたのよりもキツそうなんだが。

さて、この場合、不動産屋さんが俺を入居させるために若干軽めに伝えたのか、それとも目の前の女性が誇大して言っているのか、どちらだろう？

「大家もいい加減、お化け部屋の入居者募集するの止めりやいいのになア。……少年、さっき言ったように、丁度二階に部屋が空いてるし、そっちに移ったらどうだ？ 家賃は今より高くなるだろうが、それでもこの辺りじゃかなり安いぜ、このアパートは。なんならあたしが大家に口聞いてやってもいいしよ」

黙って聞いていたら変な方向に話が進み出した。慌てて口を挟む。「ちょっと待ってください。……あの、まだ話が読めないというか、あなたがなにを言いたいのか分からないんですが。俺をあの部屋から追い出したいんですか？」

「だから、忠告だよ。助言って言ってもいい。あの部屋はマジでヤバイからやめとけ、って言ってるのさ」

とん、とん、とテーブルを指でつつきながら姐さんは続ける。俯き気味になっているために半乾きの前髪が垂れ、その表情を窺うことができなかった。

「いいか？ 怪奇現象ってのは、基本的に段々と酷くなっていくんだよ。この場合だと、住人が怖がっている様子を楽しんで、より過激で直接的な怪奇現象を起こす……そういう幽霊があの部屋には取

り憑いてんのさ」

「……オカルト方面に随分とお詳しいようで」

幽霊。幽霊が取り憑いてるときたか。思わず眉に唾を塗りたくな
ってくるな。

肩を竦めながら放った俺の言葉に、姐さんは顔を上げて不機嫌そ
うな顔で睨んできたが、特に弁解はしないようだった。

うーん……これはちよっと、想定よりも“微妙な”人に関わって
しまったのかもしれない。怪しい勧誘や商売の話ならきっぱりと断
るところなんだけど、別に幸運を呼ぶ壺とか霊験あらたかなお札と
かを勧められる様子はない。かといって百パーセント善意で言っ
ているのかどうかは測りかねるし、仮に善意だとしても別の意味で危
ない人だ。

ああ、美人に釣られるんじゃないやあなかった。「変な女に引っ掛かる
んじゃないよ」という母の言葉を今更思い出した。もっとも、先に
思い出してても俺は喜んで釣られただろうけどな。美人に弱いのは
男の性だと言いついておこう。

姐さんがなにも言っただけで来なくなったので、俺のほうからまとめに
かかる。

「さくら姐さんの言い分をまとめますと。俺の部屋にはお化けが取
り憑いている。怪奇現象が起こる……とすれば、それはそのお化け
せい。段々とエスカレートしてくるので、早いうちに部屋を引き払
っておけ。そしてさくら姐さんはそれを善意で言っている。……こ
ういうことでオーケーですか？」

「オーケーだ」

「わかりました。ご忠言はありがたく頂戴しておきましょう」

慇懃すぎる言い方がいけなかったのか、姐さんは半眼で睨んでき
た。

「……信じてねえだろ」

「いやいや、そんなことは」

俺は満面に笑顔を作っただけ。

「とりあえず“幽霊さん”を殊更に刺激せず、特に怖がったりというリアクションをしなければ良いんでしょ？」

「……そういうことじゃねーし、それができれば誰も苦勞しねえんだよ」

頑固者め、と姐さんは吐き捨てて腕を組んだ。胸が押し上げられ、むにゅんという柔らかそうな擬音が俺の耳に届いた気がした。

苦勞して視線を彼女の目に固定しつつ、俺は反論を試みる。

「頑固っていうか、どっちにしろ俺はあの格安部屋を出ていくわけにはいきませんからね。親の仕送りもない貧乏学生に選択肢なんてないわけですよ」

と、そこで俺はさくら姐さんの反応を待つことなく立ち上がった。「さて、と。少し長居しすぎちゃいましたね。俺も荷物の片づけが残ってるんで、この辺でお暇させてもらいます」

「……………わかったよ」

姐さんは諦め気味に溜息をついて言う。

「じゃあせめて、なんかあったらあたしに相談してきな。割引で聞いてやるぜ。学生割引プラス隣人割引で格安だ」

「……いや、無料じゃないんすか」

「こっちも商売なんだ、無料なのは初回だけだ」

「――商売？」

咄嗟に聞き返すと、無然とした表情が返ってきた。

「……なんでもねえ。忘れろ」

すぐく気になるワードなんだ、そう言われて忘れられるはずがない。

しかし問い詰めても答えてくれそうな感じではなかったので、大人しく退散することにした。

……ああ、そういえば。

律儀に玄関まで見送られたところで、言い忘れていたことがあったことに気がついて立ち止まった。

「さくら姐さん」

「……なんだよ」

「お茶、おいしかったですよ」

「……………」

なに言っただこいつ、みたいな目で見られた。

失敬な、わざわざステキな微笑みまで浮かべて言ったというのに。この台詞と表情で落ちなかった女性は今までいなかった必殺スマイルである。それが初めて破れてしまった。……まあ、試したのは今回が初めてだから当然だが。

盛大にスベったのを自覚しつつ扉に手をかける。飛び込んできた外気が頬を鋭く切り裂いてきた。思っていたより部屋の中は暖かかったらしい。

外に足を踏み出したところで、背中に声が掛けられた。

「……ま、気に入っただんなら、また来たときに出してやるよ」
来る気になるならな。

最後にぼそりと呟かれたその言葉とともに扉は閉じられた。
なんとなく、その扉を数秒ほど見つめる俺。

「……じゃあその時はなにか甘いものでも持っていきますよ」
独り言をつぶやき、ふう、と息を吐く。

息が白く染まるほどには気温は低くないらしかったが、俺は身を縮込ませながら足早に自分の住処へと戻って行った。

「2」お隣さん？ （後編）（後書き）

ちょっと文章が固いかな……。その上、回りくどく説明くさい部分も多い気が。キーワードに『ライトノベル』って入れてますが、こんな読み難いラノベはないでしょうねえ。時間がないので文章の修正はあまりしませんが、今後も読み難くなりそうならキーワードを変更しようと思います。

あと、メインヒロインの登場は次回です。ラブコメなのにメインヒロインの登場が遅いってどうなんだろう……。

プロローグ的な感じで先にちょこっと出しといった方が良かったですかね？

色々意見や感想があれば気軽にどうぞ。パソコンから閲覧されている方は下の「web拍手」での一言コメントもご利用ください。

「3」怪奇現象？（前書き）

※「2」の前編を中心に微修正。

自分（青磁）用のロールケーキを冷蔵庫の中へ入れる行動とそれに付随する描写を追加・修正しました。

前話を読み返す必要まではありませんが、冷蔵庫の中にロールケーキを入れたという前提で今回の話をお読みください。

こういう後出し訂正はタブーだと思いますが、どうかお許しを……。

「3」怪奇現象？

「3」

さくら姐さんの部屋を辞した俺は自分の住処へと戻ってきた。

幸いなことに今度は部屋が異様に冷え込んでいるということもなく、人がいなかった分だけ姐さんの部屋より少し肌寒いかな、という程度の室温だ。

靴を脱ぐのもどこかしく、俺は部屋に入るやいなや、ベランダ際のベッドに仰向けに飛び込んだ。

「いってえ……」

組み立て式のパイプベッドにスプリングやクッションなんて高尚なものはない。そのせいで衝撃がダイレクトに全身に伝わってしまい、ベッドの上でしばし悶える。何やってんだ俺は。せめて布団ぐらい敷いておけばよかった。

部屋の中は少し薄暗かった。西側に高いマンションが立っているせいか、アパート内で最も西に位置するこの部屋は夕焼けが拝めならしい。

「ああ、……」

顔を固い板のベッドに埋めたまま意味もなく唸ってみる。痛みが引いた後も身体を起こす気にはなれなかった。

なんか……今日はもう疲れた……

思えば朝早くに起きて実家を出発し、新生活への興奮で電車の中ではろくに眠れなかった。辿り着いたのは右も左もわからない新天地。それから荷物整理で休まることもなく。

そして隣室でのやりとり。前半はまあ、目の保養になったりして良かったが、後半の話が微妙だった。

『あの部屋はマジでヤバいからやめとけ、って言ってんのさ』

そんなことを言われても困る。彼女に言った通り、転居という選

択肢は取れないし取りたくない。

彼女の言を信じるなら、この部屋は本当にヤバいのかも知れないけど、そう易々と信用できるか、っていうのが正直なところだ。

さっきはあえて追求しなかったが、姐さんの目的が結局よくわかっていないし。『商売』とか口を滑らせてたし。

この部屋が異様に冷えていたのだって、もしかしたらあの人がかにか仕組んだのではないのか。

そんな疑いさえ持ってしまう。

「……………」

口はそれなりに立つ方だと自負しているが、それは初対面の人を相手取っても精神的に疲労しないということとは無関係だ。

よって、気を張っていた反動により今の無気力状態に至るわけである。

「あ……………そういえば荷物整理の途中だったか……………」

顔を横にやると中途半端に開けられた段ボールが目に入った。

その現実から逃避するようにベッドの上で反転し、仰向けになると、丁度正面にエアコンの下部が見えた。

傷ひとつない白いエアコン。

プラグの差さっていないエアコン。

ふと思い立って、試しに稼働させてみることにした。特に深い理由はない。一応、使えるかどうかを試すだけだ。

気だるい身体を起こし、エアコンの横から伸びるプラグを手にとる。

「……………で、どこだよ、コンセントは……………」

見当たらない。普通はエアコンのすぐ傍にあるはずなんだが。

おいおい。これじゃあ使えないじゃねえか。

なんだこれ。着工ミス？ 使えないエアコンなんてただの白い箱だ。それとも延長コードでも引っ張って来いつてのか。なんというセルフサービス。

この仕打ちに本格的にやる気がなくなつて、再びベッドにダイブ

する。痛い。学習能力がないのか俺は。そのうちベッドの方も壊れそう。今後は注意しよう……………。

……………

……………

……………

……………——ガタッ

「んん…………？」

いつの間にか、うとうとしていたらしい。なにかの物音に意識が引き上げられた。

音は上からだったような気がする。また二階の住人がなにかしてるのか、うるせえなあ……と寝惚けた頭で考えたところで、唐突に隣の姐さんの言葉を思い出す。

この真上、二〇四号室は空室だ。

……………。

幽霊なんて気にしないと最初に決めたんだ。それを貫くとしようじゃないか。

「——さて、荷物整理でもするか」

あえて行動を口に出すことで、思考を強制的にストップさせてみる。

それが功を奏したのか、その後、数十分ぐらいは物音が聞こえることなく片付けが捗った。

さて、残る段ボール箱は二つ。中身はどちらも衣服で、その内のひとつは夏物なので今開ける必要はない。もう一つの方も適当にクローゼットにしまい込めばいいだけなので、ものの数分で終わるだろう。これで引っ越しはほぼ完璧だ。

そして俺はクローゼットを開き————

「……………」

無言で閉じた。

そして今見た光景を記憶の奥底へ押しやろうと努力してみる。
見えない見てない。俺はなにも見てない。

御札おふだが一面に貼ってあるクローゼットなんて俺は見なかった。

……………。

残念ながらここ以外に服を収納できるスペースはない。現実逃避は不可能だ。

覚悟を決めて、俺はもう一度クローゼットを開け放った。

クローゼットと言っても、ただ突っ張り棒が通されているだけではなく、押し入れみたいなスペースも確保されている和洋折衷といった趣のものだ。

部屋の明かりに照らされてなお薄暗いその中には、何十枚もの御札が奥の壁一面を覆いきるほどに貼ってあった。

御札はそれぞれ黄ばんでいて、やたらと達筆な草書体で何某かが書かれていた。いや、字ではなくなにかの紋様かもしれない。よく観察してみれば、一枚一枚別の紋様が描かれているようにも見える。まあとにかく、いかにも『なにかを封印してます』的な雰囲気だった。

直接幽霊を目にするよりも、こういう、間接的に幽霊の存在を示す物のほうが不気味に思えるのは俺の感覚がおかしいのだろうか。まあ幽霊なんて実際に目にしたことがないからそう思えるのかもしれないが。

——ガタ……

上から聞こえる物音に促されるようにして、俺は御札クローゼットに服を詰め込んで行く。念のため、御札がはがれないようにだけは気をつけておいた。幽霊がいがいがに決めたが、わざわざ現れる可能性を作ってやることもない。触らぬ神にたたりなし、だ。

「……とりあえずこんなもんか」

服を仕舞い終え、ここに俺の引っ越しが完了した。机に置いた置時計を見ると、五時を回ったところだった。

足りないものとかそのうち出てくるだろうが……それは追々やっていこう。

それより、一区切りついたら急に甘いものが食べたくなってきた。今こそ自分用に買ってきたロールケーキを食すときだ。これから夏休みに帰省するまでの四ヶ月間以上も食べられなくなるんだ、美味しいうちによく味わって食べよう。

機嫌よく鼻歌を歌ったりしながら、冷蔵庫を開けてロールケーキを……………お？

あ、れ？

冷蔵庫の中が……………空っぽ？

つまり……………ない。

ない！

俺の、俺のロールケーキが！

ない！！

「いやいや待て待て落ち着け……………。そんなはずないだろ」

だが落ち着いて考えても、俺が冷蔵庫にロールケーキの箱を入れたのは確かだと思えない。冷凍庫の方にはきちんと保冷剤が入っているし、記憶違いということはないだろう。

念のため部屋中を探しまわったが、やはりどこにもない。

泥棒が入ったということもないだろう。財布なども部屋の中に置きっぱなしだったが、触られた形跡などない。

じゃあ一体どうしてロールケーキだけが……………。

——カタ……………

また聞こえる奇妙な音。お隣さん曰く、これはこの部屋に取り憑く幽霊の仕業だとか。

……………まさか、幽霊がロールケーキを食べたともいうのか？

それこそ意味不明だ。幽霊がものを食べるはずがない。いや、でも、お墓とかにはお供えとかするんだから、もしも現世に霊がいるならそれを食べたりするのか？ でも俺は部屋の幽霊にお供えするつもりでロールケーキを持ってきたわけじゃない。あれは俺のだ！

俺に害がないなら幽霊がいてもいいや、とか軽く考えていたけど、俺のロールケーキを無断で食べたというなら話は別だ。

この部屋に取り憑く幽霊とやら。

貴様は敵だ！

……………。なんか思考が混乱してきたな。

はあ……………また疲れてきた。この件は一度置いておこう。ロールケーキの恨みは決して忘れないが。

腹を立てたら腹が減ってきた。

仕方なく……………仕方なく！ 甘いものは諦めて、夕食のことを考えよう。

さて、昼間に行ったファミレスにまた食べに行くか、近くにあったコンビニで弁当でも買うか……………。

ちなみに、自炊という選択肢が生じない時点で俺の料理の腕は推して測るべし、だ。あ、でも、節約生活するなら自炊が一番か。一応調理道具は一通り揃ってるけど……………。

「今から買い物ってのもなあ……………」

時刻としては夕食の買い出しには丁度良いだろうけど、精神的に非常にしんどい。慣れない買い物の上に慣れない料理なんてする気力はない。

ここは非常食として持ってきたカップラーメンでも食つとこう。そして寝よう。

……………初日から自堕落な生活への第一歩を着実に踏みしめてる気がするが、気のせいだと信じたい。

キッチンに立ち、やかんに火をかける。

それからすることもないので、シンクに凭れかかってぼうつと揺れる火を見つめていた。

……………。

静かだな。

実家は決して騒がしい家ではなかったが、こんな風に人の気配の全くない静寂というものは感じたことがなかった。

自分以外の誰もいないというだけで、こうも感じ取る雰囲気が違うものなのか。

——男独りの部屋で、カップラーメンを啜る。ふと、そんな光景を想像してみた。

念願の一人暮らしだというのに、なんだかその光景は酷く滑稽で、寂しさに満ち溢れたものだと思えた。

「いくらなんでもホームシックには早すぎるだろう……」

思わず苦笑が浮かぶ。俺はそんなに繊細な人間になった覚えはない。

水を入れ過ぎたか、まだお湯は沸く様子はない。

俺はやれやれと思い、

——カタ……

お湯が沸くまでの間、

——パキッ

暇なので、

——コトン……

音楽でもかけようと、

——ガタ……

………。

——カタカタ……

………。

——ガタ。ガタ、ガタガタガタッ

………ぷちん。

「ああもう、やかましいわッ！ 誰がてめえの演奏を聞きたいつつたッ！ 静かにしろッ！！」

——…。

いい加減耐え切れず、これまでに溜まった鬱憤を全て込めて怒鳴ると、上から聞こえていた音がピタリとやんだ。

なんだよ、お化けでもびっくりすることってあるのか？ えらく

肝の弱いお化けだなおい。

なんてバカにしたようなことを思った瞬間。

——ミシミシ……

「えっ、ちよつと待……!?!?」

俺ではない誰かの声。

——バキィッ!!

一際大きな音を立て。

「うわああああおおおおおう!?!?」

奇妙な叫びとともに。

天井を突き破って。

頭上から。

降ってきた。

——女の子が。

「4」不法侵入者？

「4」

「……………」

「……………」

十畳一間の部屋の中。無言のまま見詰め合う俺と少女。

ばらばら……と、細かな木くずが両者の頭に降ってくる。まるで二人の出会いを祝福する紙吹雪のようだ……なんて思えるわけがない。

年齢は高校生くらいだろうか。少女はあどけなさが微かに残る顔一杯で『呆然』という言葉を体現しようとしていた。より具体的に言うなら、尻もちをついた態勢のまま、ポカンと間抜けな感じに口を半開きにしていた。

美人系か可愛い系かというと、小顔で可愛い系な顔立ち。可愛いか不細工かかというと、まあ一応、大きな目がチャームिंगで可愛いと言えなくもない。そんな微妙なレベル。

服装は上下とも色気の欠片もない、色あせた朱色のジャージだ。しかもサイズが小さいのか、白い手首や踝くるぶしが露わになっていた。服装もさることながら、体型も貧相と言っている。全体的に細いのだ。特に胸や尻などはどこぞの隣人のお姐さんと並ぶと可哀そうになること間違いなしだ。

髪は乱れ飛び、血色もあまり良いとはいえず、見ただけで栄養状態が芳しくないことが窺えた。

ただ、不思議なことに、そんな状態であっても少女からは陰気さを感じられず、むしろ陽気な雰囲気すら漂わせていた。

一通りの観察を終え、今度は彼女の真上を見上げてみると、天井に丁度人ひとりが入れる大きな穴が空いていた。その先は真っ暗でよく見えないが、どうやら二階に通じているわけではなさそうだ。

……状況を整理しよう。

女の子が天井を突き破って俺の目の前に降ってきた。
以上。

この上なく分かりやすく、この上なく意味不明な状況だということがお分かりいただけははずだ。

無理矢理この状況を説明するなら、天井裏（一階なのに天井裏？）にいたこの少女が誤って天板を踏み抜いたということだろうか。

……いや、っていうか、それしか考えられないじゃないか。

つまりこの子は……不法侵入者？ 空き巣、か？

そんな推測に至って少女に警戒の目を向けると同時、彼女の方も二重瞼をぱちくりと瞬かせ、やっと状況を理解したようだ。部屋の主である俺の顔を見上げて気まずそうに口角をひくつかせている。

——ピイイイイ

俺たちのお互いに牽制し合うような硬直は、やかんが湯気を勢いよく吹くまで続けられた。

「え……と。おにーさん、やかん、鳴ってるよ？」

「あ？ ああ……」

なぜか少女に言われ、俺は素直にキッチンに向かって火を止める。俺も相当混乱しているようだ。

カップラーメンにお湯を注ぐことなく、お茶を入れるでもなくそのまま戻ると、少女は逃げ出す様子もなくちょこんと座っていた。口をひき結んで縮こまるその様は、悪いことをして親に叱られるのを待つ子供のようだった。

その様子に俺は幾分か冷静さを取り戻せた。人間というものは、自分が優位に立っていると認識するだけで余裕が出てくるものだ。

俺は口を開く。

「……で？」

言葉足らずどころかたった一音になってしまったが、^{すいか}誰何の意は伝わったのだろう。少女はしばらく視線を宙に漂わせた末に、「ゴホン」とわざとらしく咳払いをして、

「どっ……、どうも、天井裏居住のお化けです。う、うらめしや」

やけくそ気味の口調である。しかも手を下にだらりとさげてお化けのポーズをとるといふ小芝居つき。

うん、いいだろう。そっちがその気なら俺も相応に応えてやろう。俺は携帯電話を手にとり、番号を押さずそのまま耳に当てた。

「もしもし、警察ですか？ 不法侵入者が……」

「――あぁん、そんなご無体な！」

少女は慌てて俺の腕に飛び付き、通報を阻止しようとしてきた。

そんな反応を予期していた俺はひよいと避け、

「無体を働いてるのはお前だ、この不法侵入者」

冷静に責め立ててみた。

威嚇か泣きまねか、「ううう」とよくわからない唸り声を上げる

少女を見下ろしながら、どうすべきかと考える。本当に警察に通報してもいいが……。

「……ん？」

と、そこで俺は、少女の周囲に散らばる“荷物”に初めて気が付いた。

プラスチック製の食器、鍋にカセットコンロにランタン、寝袋らしきものもある。大きな旅行カバンからは衣服などがはみ出していた。

……アウトドアお泊まりセットだ。生活に最低限必要なものが揃っている、完全無欠なお泊まりセットだ。

もちろん俺のものではない。少女と一緒に落ちてきたみたいだ。

とすると、これは……。

俺は半眼になって少女を睨む。

「不法侵入っていうか……まさかお前、不法入居者か？」

「ぎくうっ」

なんだその擬音。口でそんなこと言うやつ初めて見たぞ。

「な、なにを根拠にそんなこと言うのかね！」

「いやお前、いま凶星指されたような反応してただろ。半ば認めてんじゃねえか」

「……………なにを根拠にそんなこと言うのかね！」

めげずに繰り返す少女。微妙にめんどくさいやつだ。

溜息を吐きつつ、仕方がないので懇切丁寧に教えてやることにする。

俺は床に散らばっているお泊まりセットを指さし、

「その荷物。どう見てもここで寝泊まりしていたと言わんばかりなんだが」

「ぎくぎくうっ」

入居してなきゃ電気やガスは基本的に止められてるからな。ランタンやカセットコンロがあるのはおかしくない。

「あと、この部屋、幽霊が出るって噂だけどさ……………それもお前の仕業じゃないのか」

「ぎくくーん」

正直こっちは当てずっぽうだったんだが……………凶星なのかよ。隠す気ないだろこいつ。

——要するに。

こいつはここに住むために、入居者が来る度、幽霊のまねごとをして追い出していたんだろう。

『部屋に一人きりのはずなのに人の気配がする』——実は天井裏に潜んでいました、と。

『変な音や声が聞こえる』——天井裏かどこかでわざと物音を立てていました、と。

『寝ていたら寒気がして飛び起きた』——寝ている間に冷房のスイッチを入れました、と。

『ヒトダマみたいなのが天井付近に浮いていた』——ランタンか何かを天井から釣り下げました、と。

きっと他にもあの手この手を使って入居者をビビらせ、しまいには『いわくつき物件』となるまでに至った。そんなところか。

「お前がお化けの振りをしていたわけか……。今日ずっと天井から物音聞こえたのもお前の仕業だな？」

試しに軽く問い詰めてみると、

「な、なんと、そこまで見破られるとは……！　あなたは一体この名探偵！？」

というアホみたいな自白が返ってきた。

すると、なにか？　部屋が冷えるあの現象もこいつの仕業だったのか。俺が出て行ったときを見計らってエアコンを操作したというところだろう。こんな間抜けな奴に騙されるとは、動揺していた自分がひどく馬鹿で滑稽に思えてくる。

……ん？　あれ、なにかおかしいような気がするが……？

——いや待て。

そんなことよりも、だ！

なにに優先してでも聞いておかねばならないことを思い出した。

そう、とてつもなく重要なことだ……！

俺は震えそうになる声を押さえつけ、言い放った。

「ロールケーキは……」

「はへ？」

「俺のロールケーキを食ったのもお前か」

ロールケーキ。俺のロールケーキ。楽しみにしていたロールケーキが！

他のことについてはガキの悪戯だと笑って許せても、これだけははつきりとさせておきたい。

少女は俺の剣幕にたじろぎながら、目を逸らしてこう言った。

「し、知らないより。冷蔵庫なんか全然触ってないしいー」

「……俺は一言も、ロールケーキが冷蔵庫に入ってるだなんて言っていないんだけどな？」

「……………あああっ！？」

ダメだこいつ。カマをかけるまでもなく自滅しやがった。

さてどう落とし前をつけてもらおうかと思案する俺の機先を制す

るように、少女は素直に頭を下げてきた。

「ごっ、ごめんなさい……。ここしばらくまともにご飯食べてなくてお腹ペコペコだったから、つい……」

「……………」

血色の悪い顔。細い手足。毛先の散った髪。貧相な胸……は、関係ないかもしれないが。

とにかく、彼女の外見を見ているだけで荒んだ生活を送っているのだと察することはできた。だから彼女の言い分も、わからなくはない。

浮かんだ感情は、同情か、憐憫か。

あまり愉快な感情ではないけども……捨てられた子猫に餌をやるようなものだと思って、俺は彼女を許すことにした。

ただ、ロールケーキの虜になった者として、これだけは聞いておかねばなるまい。

「うまかったか？」

「へ？」

「ロールケーキ、うまかったか？」

唐突過ぎる俺の質問に少女はしばらくきょとんとしていたが、やがて満面の笑みを浮かべて頷いた。

「すっつごくおいしかった！ あんなの食べたことないよ！」

——よし、ロールケーキ信奉者をまた一人ゲットしたぞ。

ちなみに信者を10人増やすごとに、ロールケーキ一週間分が無料で贈呈される。いや、マジで。もちろん、俺の実家の近所のあの店限定の話だが。

っと、そんなことはどうでもいい。

一つ息を吐き、気分を入れ替える。

「まあ、それはいいとして。お前、名前は？」

一応、なにをするにしても名前を知っておいて損はないはずだ。訊ねると、ロールケーキの味を思い出して緩んでいた頬が一転して強張った。そしてぽつりと呟くように言う。

「……………るい」

「るい？ それは下の名前か。じゃあフルネームは？」

「……………」

途端にだんまりを決め込む少女。

呆れて溜息も出ないな。

「お前な。自分の立場わかってんのかよ……」

「わ、わかってるよ。でも、あんまり好きな名前じゃないから……」
るいと名乗った少女の言い分ははっきり言って意味不明だが、とにかく苗字を言うつもりがないのは確からしい。もしかしたら『るい』というのも偽名かもしれない。

「はあ……。まあ、いい。で、お前は勝手に人の住居にすみついてたわけだが……」

「あ、あのっ！」

るいは俺の言葉を鋭く遮り、

「ご無理はご承知の通りですが、お願いがありますでござい
ますです！」

無茶苦茶な敬語を駆使してなにやら懇願してきた。

「なんだよ、言ってみろ」

どうせ今回は見逃してくれとか、そんなところだろう。

そう軽く考えていた俺の予想は、変な方向へ裏切られることになる。

「あのですねっ。——わたしを、ここに住まわせてください！

」

「……………、はああ？」

ここに、住まわせる？

俺とこいつが一緒に住むということか？

つまり、同棲のお誘い？

初対面の男を部屋に上げるお姐さんといい、この辺りの地域の女性の間ではそういう積極性が常識だったりするのだろうか。

なににせよ、俺にはこいつを住まわせる義理なんてないし、初対

面の赤の他人——それも犯罪者——を無償で止めるほどのお人よし
がこの世にどれくらいいるだろうか。

彼女の要求は全く以て理解不能で、意味不明だ。

決してお人よしではない俺がそんな要求に応えるはずもなく、俺
は強く突っぱねた。

「ダメだ、出ていけ。今すぐ出ていけば警察とかにも知らせない、
見逃してやるから」

これは譲歩というよりは、いちいち警察や大家さんを呼ぶのが面
倒だという理由だったりする。特に何も盗られていないし（ロール
ケーキ以外は！）、別に構わないだろう。

あ、でも大家さんには後で幽霊騒ぎの誤解を解いておくべきか。

……いや、むしろ言わないほうがいいか？ 下手したら家賃が通常
料金に戻ってしまう。

よし、黙っておこう。世の中は小狡こねたかく生きていくべきだ。

……小狡く生きるということなら、目の前の少女も負けていない
のかもしれない。

ふと、そんなことを思った。

入居者を騙し、おびえさせ、追い出す。そして自分は悠々とそこ
に暮らす。

これを小狡いと言わずになんと言うのだろうか。

しかも『一階だから天井裏なんてないだろう』という先入観をも
味方につけている。おかげで、上から物音が聞こえても、誰かがそ
こに潜んでいるなんていう発想が生まれなかったのだ。

もしもそれを狙っての行動だとするならば、こいつは結構なやり
手だ。

るいという名の少女はなおも懇願する。

「お願いです！ ここ以外に行くところなんてないんです！」

「いやいや。家出だかなんだか知らないけど、さっさと親にでも泣
きつくのが賢明じゃねえの」

これは至って常識的な対応だと思う。これできつと言葉に詰まる

だろう、そう思った。

だというのに、少女は泣きそうな顔でこう言うのだ。

「……親なんて最初からいないもん。子どもの頃からずっと施設で育ってきて……そこを追い出されてからはずっと独りで生きてきたの」

「……………」

親がいない。そして養護施設暮らし、か。

——訂正しよう。

こいつは小狡いんじゃない。

狡いんだ。

それも、かなりのレベルで。

なんせ、聞いてもいないことまでペラペラ喋りやがる。それも、故意か無意識か、人情に訴えかけるようなことを選んで。

言葉に詰まりかけた俺だが、ここで流されるわけにはいかない。どうにか仕切り直そうと質問を試みた。

「大体な、なんでわざわざここに住みたいなんて言うんだよ？ 一応言っておくけど、ここは俺の一人住まいだぞ？」

「そうだけど……でも、こんなチャンス、他にないし……。普通は見つかったらすぐに摘まみ出されちゃうけど、ちよつとでも話聞いてくれようとしたの、おにーさんだけだし……」

……対応を甘くしすぎたか。問答無用で警察を呼ぶべきだった。どうにも、俺は考えが浅はかになるときがあるな。

るいの懇願は続く。

「だから、おねがいっ、わたしをここに置いて！ なんでもするかー！！」

「——はっ」

さすがにその言葉には、思わず鼻で笑ってしまった。こいつはさつき俺が一人住まいだと言った意味が理解できなかったのだろうか。「なんでも、ね？ じゃあ『俺に犯される』と言われたらお前は素直に従うのかよ？」

「そっ……!？」

少女の顔は赤く染まり、次に青くなり……そして最後はゆで卵を丸のみにしたような顔で言った。

「……………そ、それで、ここに置いてくれるなら……」

「——アホか」

心底から眩きが漏れた。

アホだ。こいつは間違いなく、アホだ。

馬鹿にしたニュアンスがストレートに伝わったのだろう、今までの殊勝な態度はどこへやら、少女は顔を真っ赤にして怒りだした。

「な、なにさー! 人が覚悟決めて言ってるのに! 乙女の純情を返せ!」

あまりにも馬鹿馬鹿しい言い分に、また鼻で笑ってしまった。

「そんな覚悟があるなら風俗で働け。そっちのほうがよっぽど儲かるし、金があれば住む場所も作れる。上手くいけば“あしながおじさん”でも見つかるかもしれねえしな」

「えっ、あしなが……? いくら足が長くてもおじさんは嫌だけど

……」

「……………」

うん、確定した。こいつはアホだ。さっき『やり手かも』なんて思った俺が恥ずかしいわ。

でも真面目な話、貧相なこいつが風俗で働けるかどうかは怪しい。いや、それ以前に年齢的にアウトか。でもそれならそれでやりようはいくらでも……………

……………なんか最低なこと考えてるな、俺。

軽い自己嫌悪に陥る。

——実際のところ、彼女の境遇は俺には理解できなくもなかった。親がいないだとか、施設暮らしだとか、ずっと独りだとか、同情を誘うような言い方はあまり気に食わない。でもそれは逆にいえば、そうしなければならぬほど切羽詰まっているということなんだろう。

なにが俺を後押ししたのか、気が付けば俺はるいに訊ねていた。
「お前、施設とやらを出てから今までどうやって暮らしてたんだ」
「えっ……と、ここみたいに勝手に空き家とかに入り込んで、もう一年近く……」

気まずそうに言うるい。少しでも罪悪感があるならやめりゃいいのに。……やめられるならやめてるか。

「住居はそれでいいとしても、飯とか食わなきゃならねえだろ？
金はどうしてたんか」

「それは普通にバイトとか……」

「ふうん。今は？」

「え……と。ここしばらくは何も。その、履歴書にデタラメ書いたのがバレちゃって……」

「クビになった、と」

るいはこくりと頷いた。

「中卒だとバイトですら探すの厳しいし……あと、住所とか正直に書けないし……」

予想はついてたけど、高校は行ってないんだな。まあ、中卒はともかく、住所不定はまずい。

だからこそ、るいは書類に書けるちゃんとした住所を欲しているということなのだろう。

だが、養護施設というものは高校ぐらいまで面倒を見てくれるのではないか。特に、住居も定まっていらないような子どもを追い出したりするものなのか。

そういったことを訊きかけて、俺はようやく我に返った。

——何やってんだ俺は。

正直、話を聞き過ぎた。

聞いたところで俺にはどうする気もないっていうのに。どうせ裏切るのなら、中途半端に期待させるのは彼女にとって残酷でしかない。

さっきよりも深い自己嫌悪が俺に襲いかかる。自分の浅はかさが

本気で嫌になってきた。

もう、いい。もういい。とっとと追い出そう。

「……とにかく。お前の事情はお前の事情。俺にはまったく関係ない。早く荷物まとめてここから出て行ってくれ。あんまりしつこいと俺も警察に通報せざるを得なくなるぞ?」

——だが、もう遅かったのだろうか。

優しさに飢えていた少女にとっては、少しでも話を聞いてくれた俺という存在を離しはしないのだ。

「ま、待って! お願い! ここにいさせて!」

「だからダメだって言っただろうが!」

「お願い! なんなら廊下で寝てもいいから!」

「そういう問題じゃなくてだな……」

堂々巡り。

少女は同じ言葉を繰り返す。

怒鳴っても効果がないとなれば、もはや実力行使で追い出すしかないか。

そう思ってるいの肩に手をかけようとした瞬間。

「——お願いっ!」

「……な、おい!」

少女は突然、青白い手足を床に投げ出し、

「お願いします」

涙は流さず、しかし顔を歪め、血がにじむほど唇をかみしめて、

「お願い、します。……お願い。わたしを追い出さないで……」

恥も外聞もかなぐり捨て、頭を下げた。

「お願い……お願い……」

土下座の体制のまま、少女はひたすらに懇願する。

「屋根のない暮らしは辛いよ……」

少女の訴えは切実で、逼迫していて。

「もう、帰る場所がないのは嫌だよ、寂しいよ……っ!」

「——っ……」

このとき生まれた俺の感情は何だっただろう。

同情。憐憫。優越。善意。不快。嫌悪。好意。期待。共感。

その全てだったかもしれないし、言葉では表しきれない感情だったのかもしれない。そして、それぞれなに対する感情なのかもわからない。

ただ、確かなのは――

少女の訴えには俺が今までに経験したことのないほどの強い“想い”が込められていたこと。

少女の訴えに俺の心が動かされたこと。

――生まれ出た複雑怪奇な感情に俺が翻弄され、つついこんな言葉が出てしまったこと。

「……十日だ」

「――え？」

呆然といった様子で顔を上げた少女の目尻には涙が溜まっていた。そんなるいの顔を見下ろし、頭を掻きながら、俺は言葉が続けた。「ひとまず、十日だけここに置いてやる」

――ああ、言っちゃった。

俺ってそんなにお人よしなキャラじゃねえはずなのに。

まあ、あれだろう。根負けしたってやつだ。

でも、言い切った後は、不思議と心は清々しかった。衝動ってのはこれだから恐ろしい。

複雑な心境を抱える俺の横で、るいはやっと呆然自失状態から回復したらしい。

「ほっ……ホントに！？ え、ホントに！？ ホントにホント！？

……って、ぎゃん!？」

勢いよく立ち上がろうとして、勢い余って転んだ。

打ちつけた額を押さえて涙目になっている少女に手を差し出しながら、俺は言い放つ。

「ただし」

もちろんタダでここに置いてやる義理はないわけで。

「十日以内にバイトでもいいから仕事を見つけること。せめて自分の食費分は自分で払え。じゃなきゃ出て行ってもらう」

高圧的な言い方に、しかしいは嬉しそうに俺の手を取り、
「うんうんっ、それぐらいいいよっ！ 絶対払うから！」

満面の笑顔を浮かべた。

俺はるいを引っ張り上げてやりながら、なんとなく——ちよつとだけからかってみたくなった。

「あと、ついでに家事とかも任せる」

「やるやるっ、掃除でも料理でもなんでもやるっ！」

「そうか、じゃあ夜のお供も頼む」

「それもお安いごよ——うええっ!？」

るいは手を振り払って勢いよく後ずさった。

「よ、よよよ、夜って、えっと、その……つまり、アレでございませすですか？」

おもしろいぐらいに動揺を返してくれるもんだ。

なんというか、こう……イジメがいがありそうなやつだと思う。

「冗談だ。そんな貧相な身体には興味湧かねえし」

「……ううっ、喜んでいいのか悪いのか……」

まだまだ成長期だし、とかぶつぶつ呟いているるいに、俺は再び手を差し出した。

「え……っど？」

「俺の名前は青磁だ。まあ……どのくらいの付き合いになるかは分からないけどさ、よろしく頼む」

「あ……」

その手の意味を理解したるいは、はにかんだ笑みを浮かべ、俺の手をそっと取った。

「うん……うんっ！ よろしくね、セージ！」

———こうして俺の夢の一人暮らしは半日と経たずに終焉を迎え。

代わりに、恋人でもない女の子と暮らすという、わけのわからない事態になった。

本当にどうしてこうなったのやら。一時の気の迷いだとしたら、絶対後悔しそうなんだけどな。

でも、まあ――

「やった、わたしの家ができたっ！ 念願のマイホームを手に入れたっ！」

「いや、お前の家になったわけじゃねえし、俺のマイホームでもないから。ただの賃貸だ」

「細かいことはいいーのっ！ 今日はごちそう作っちゃうよー!!」

「ふと思ったんだが、お前、料理できるのか……？」

「バッチシだよ！ 涙が出るくらいのを作っちゃうからね！」

「どっちの意味にも取れる発言だなおい。それに、食材代を払うのは俺だよな？」

「ゴチになりますっ！」

「……今日だけだぞ」

――賑やかで、退屈はしそうにないか。

部屋中を元気一杯に飛び跳ねて喜ぶのを見て、俺はそんなことを思ったのだった。

「4」不法侵入者？（後書き）

第一章終了。

第一章というより、物語全体から見ればプロローグに近いです。

感想などお待ちしております。web拍手なら匿名でコメントを残せますので是非ご利用ください。拍手返信はたまに活動報告で行います。

第二章開始は最短でも二週間後くらいになりそうですので、しばらくお待ちを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5491v/>

いわくつき物件にご用心!?

2011年8月29日03時41分発行